二〇二四年度　田園調布学園大学
全学部全学科専攻　共通

国語　入学試験問題

一般選抜（個別試験型）A日程

受験番号

（注意）
一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
五、試験時間は六〇分です。

氏名

（一）　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある対象についてKUTSUということばの音を聞いたとしよう。子どもは、「くつ」と大人が呼ぶモノはKUTSUという音で表すことを覚える。「くつ」の一事例を見せられて、「これは何？」と問われたら、やがて「KUTSU」と答えられるようになる。同様に子どもは、黄色い甘い果物の名前が「BANANA」と呼ばれることを覚え、その果物を大人が指差して「これ何？」と聞いたら「BANANA」と答えることができるようになったとする。しかし、その子どもが、バナナ、リンゴ、ミカンが入っているボウルから「BANANA」を取ってと指示されたのに、リンゴを取ったりミカンを取ったりしたら、親はわけがわからず、ビックリするだろう。

だが、ことばの形式と対象の間には双方向性の関係性があるという、人間にとって当たり前のことは、動物にとっては当たり前ではないのである。今井が何年も前に見た、ある動画を紹介したい。京都大学aレイチョウ類研究所（当時）の松沢哲郎教授とチンパンジー「アイ」の実験の動画だった。

アイは訓練を受けて、異なる色の積み木にそれぞれ対応する記号（絵文字）を選ぶことができる。黄色の積み木なら△、赤の積み木なら◇、黒の積み木なら○を選ぶという具合である。アイはこれをほぼ完璧にできるという。訓練のあと、時間が経ってもその対応づけの記憶は保持されていた。

しかし、動画後半の展開は衝撃的だった。今度は、アイに、記号から色を選ぶよう指示した。黄色、赤、黒など、最初の訓練で用いた色の積み木を用意した。△を示したら異なる色の積み木から黄色い積み木、◇を見せたら赤い積み木、○を見せたら黒い積み木を選べると、当然私たちは予想する。自分の子どもでそれができなかったらパニックになるかもしれない。だがアイは、訓練された方向での対応づけなら難なく正解できるのに、逆方向の対応づけ、つまり異なる記号にそれぞれ対応する積み木の色を選ぶことが、まったくできなかったのである。

人間の子どもの言語の発達を研究する今井は、この事実に①驚愕し、興味を掻き立てられた。普段bブンケンをフォローしている人間の子どもの言語発達の分野で、②このような事実を指摘する論文をそのときまで読んだことがなかった。実際、ヒトの幼児のことばの意味の推論を研究した実験は、ほとんどすべて、子どもにある対象を指差して「ネケ」という新奇なことばを教えた場合、子どもが「ネケ」ということばを理解したかどうかを確かめるために、その対象とそれとは異なるモノを一緒に見せ、「ネケはどれ？」と聞く方法が標準的であった。

しかし、この実験の方法は、AはXであると教えたときに、子どもが同時に逆方向も学習できており、XはAであると「教わる」ことを［　Ⅰ　］しているのだ。つまり、この黄色い積み木はKIIROであると教えたとき、KIIROという音は黄色い積み木を指すとか、この赤くて丸い果物はRINGOであると教えたとき、その逆のRINGOという音は赤くて丸い果物なのだと思いこむことを［　Ⅰ　］している。この逆方向への一般化こそが、特定の音が対象の名前なのだという理解を支えているとも言える。

だが、よくよく考えてみると、この一般化は論理的には正しくない。「AならばX」は、「XならばA」と同じではない。このことは、「ペンギンならば鳥である」が正しくても、「［　Ⅱ　］」は正しくならないことからすぐわかることだ。

アイが「黄色い積み木は△、赤い積み木は◇」と学習しても、「△は黄色い積み木、◇は赤い積み木」と選べないのは、論理的にはまったく正しいのである。

対象→記号の対応づけを学習したら、記号→対象の対応づけも同時に学習する。人間が言語を学ぶときに当然だと思われるこの想定は、論理的には正しくない過剰一般化なのである。

「AならばX」を「XならばA」に過剰一般化することは、人間には日常的に頻繁に見られることである。以下は、私たちがとくに「推論」だという感覚を持たずに行っている推論である。

太郎は仕事が5時までに終わったら、飲み会に参加すると言った。太郎は飲み会に来なかった。よって太郎は5時までに仕事が終わらなかったに違いない。

外を見たら道路が濡れていた。気づかないうちに雨が降ったに違いない。

右の二つの例は「間違い」だとは思わないだろう。しかし、これは論理学では「後件肯定の誤謬（ごびゅう）」と呼ばれる「論理の誤り」なのである。太郎が飲み会に来なかったのは、

Ⅲ

ためとは限らず、他の急用ができたためかもしれないし、疲れたので家で休みたくなったためかもしれない。地面が濡れていたのも、可能性は薄いが放水車が水をc撒いたのかもしれない。

後件肯定が誤謬であることは、次の例を見るとわかりやすい。

③英雄は色を好む。Xは色を好む。だから、Xは英雄である。

英雄色を好むというのは有名なdカクゲンである。しかしXが色を好むからといって、Xが英雄とは限らない。英雄でない色ごのみの人物がたくさんいることを私たちは知っている。

そして、これとまったく同じ論理形式のこのような例はどうだろう。

新型コロナに罹患すると、喉が痛くなり、発熱することが多い。今、私は喉が痛くて熱がある。だから私は新型コロナにかかっている。

喉が痛くなる病気は新型コロナだけではない。インフルエンザかもしれないし、他の病気で同じ症状が出ることも十分ありうる。しかし多くの人は、新型コロナが流行しているときにこのような症状が出たら、当然のように自分もコロナ感染をしたのではないかと疑うだろう。

そもそも病気の診断は、たいていの場合、症状からその原因（病名）をe遡及的に推論するアブダクション推論（注1）である。もちろん現代医学では病名を確定するためにさまざまなテストを行う。しかし、（注2）医師が最初に病気について症状から予測ができなければ、何のテストを行うかを決めることができないのである。

人間の子どもは、幼少時からこのような論理を逆転させた思考を行う。それを④垣間見ることができるエピソードを、再び（注3）「ゆる言語学ラジオ」のデータベースから紹介しよう。

ラジオネーム：バタフライエフェクトさん（2歳7か月）

天気予報が雨の日は「今日は雨だから長靴履こうね」と言って、長靴を履かせていました。

ある長靴を履いて出かけた日、予報通り雨が降ってきたとき、「今日は○○（自分の名前）が長靴を履いたから雨が降ったの？」と聞かれました。雨が降るから長靴を履いたのに、論理が逆転して長靴を履いたから雨が降ったと勘違いしたようです。

Ⅳ　　をひっくり返す。大人でもよくあることである。たとえば、いつも店の前に長い行列がある店があると、（「おいしいから混んでいる」ではなく）「混んでいるからおいしい」と考え、つられて自分も列に並んでしまう。これと関係するのが、必要条件と十分条件をひっくり返すバイアス（注4）だ。⑤筆者たちは大学生を教えているが、「8割の出席が単位取得の必要条件」と伝えると、多くの学生は「8割出席すれば単位がもらえる」と思うのである。

（今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』より）

注

1　非論理的で誤りを犯すリスクがある推論

2　原文にはこの後に「第6章で述べたように、」という表現がある。

3　掲出文以外の箇所でも「ゆる言語学ラジオ」のデータベースを用いている。

4　人の思考や行動に偏りが生じること。思い込み。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「驚愕し」、④「垣間見る」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①驚愕し

ア　あきれはてて
イ　おどろき感心して
ウ　不思議に思って
エ　はっとして
オ　ひどくおどろいて

④垣間見る

ア　そっとみる
イ　じっとみる
ウ　ちらりとみる
エ　きちんとみる
オ　ついでにみる

問三　傍線部②「このような事実」の内容を示す部分を本文中から六〇字以内で抜き出し、書きなさい（句読点や記号も含む）。

（下書き用）

問四　空欄Ⅰには同じことばが入る。最も適当なことばを本文中から漢字二字で抜き出し、書きなさい。

問五　空欄Ⅱに入る表現を自分で考えて書きなさい。

問六　空欄Ⅲに入る表現を本文中から十字以内で抜き出し、書きなさい。

問七　傍線部③「英雄は色を好む。Xは色を好む。だから、Xは英雄である。」は論理的に間違っているが、次の中から、論理的に間違っていない例を二つ選び、記号で答えなさい。

ア　すべての人間は年をとる。私は人間だ。だから、私は年をとる。
イ　私は納豆が好きである。私は日本人である。だから、日本人は納豆が好きである。
ウ　ソクラテスは人間である。ソクラテスは死ぬ。だから、人間は死ぬ。
エ　鳥は卵を産む。カラスは鳥である。だから、カラスは卵を産む。
オ　女子は甘いものが好きだ。私は女子だ。だから、私は甘いものが好きだ。

問八　空欄Ⅳに入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一般と特殊　　イ　具体と抽象　　ウ　原因と結果
エ　手段と目的　　オ　内面と外面

問九　傍線部⑤「筆者たちは大学生を教えているが、「８割の出席が単位取得の必要条件」と伝えると、多くの学生は「８割出席すれば単位がもらえる」と思うのである。」とあるが、「多くの学生」はどんな思い違いをしているのか。具体的に五〇字以内で説明しなさい（句読点や記号も含む）。

（下書き用）

問十　次に示すのは、右の文章を読んだ高校生が意見を述べたものである。本文の趣旨に基づいて意見を述べているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　地球上で私たち人間は最も有能な動物だと信じてきたけれど、実は長い歴史の中で、人間は論理的な間違いを受け入れることに慣れてしまったのですね。実験でわかったサルの論理的に正しい反応に、人間は反省をしなければいけないと思いました。

イ　対象→記号の対応付けを学習したら、記号→対象の対応付けも同時に学習する人間の推論は、論理的には正しくないけれど、実はこの推論が人間の言語の学習に重要な働きをしていることがわかりました。これが人間の言語学習の支えなんですね。

ウ　人間は、生まれて間もない頃から、赤くて丸い果物をRINGO、黄色い果物をBANANAと教えられ、実物を見ないでもRINGO、BANANAと音を聞いただけで実物が目に浮かぶ。ものすごい学習能力だからこそ人類は発展したのでしょうね。

エ　自分が長靴をはいたから雨が降ったに違いないと幼い子どもが言ったエピソードを聞いて思わず微笑んでしまったけれど、実はこうした推論を繰り返すことによって、その矛盾に気づきつつ、人間は言語を発達させてきたわけですね。

オ　「ＡならばＸ」を「ＸならばＡ」に過剰一般化するという事例は日常生活でも頻繁に見られます。これが論理的でないということはよく考えれば明らかですが、この過剰一般化による推論によって、人間同士のつながりが緊密になっていくんですね。

（二）　次の文章は、小川洋子の小説「帯同馬」の一節である。

「彼女」は独自の技量をもつデモンストレーションガールだが、モノレールの沿線にあるスーパーマーケットでしか仕事をしない。なぜなら、遠くへ行くことに恐怖心を抱くようになったからだ。最も不安なく移動できるのは、あらかじめ定められた場所を行き来するモノレールであると考え、モノレールに乗って移動できる範囲のスーパーマーケットで仕事をしている。

以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

仕事の行き帰り、彼女は手提げ袋を足元に置き、ぼんやり扉にもたれ掛かる。遠くへ行けない故に選んだモノレールの、多くの乗客は空港を使う旅人であり、彼らのかもし出す高揚や寛ぎや独特の疲労からは、彼女は明らかに浮き上がっている。色鮮やかなスーツケースを抱え、海外へ飛び立とうとしている若者や、書類鞄を提げた出張帰りらしいサラリーマンを、彼女は畏怖の眼差しで見つめる。この人もあの人も、どういういきさつなのかは知れないが、ああして一抱えの荷物だけを頼りに自分の住まいを離れ、どこかよその場所へ身を運ぼうとしている。あるいはその危険な移動をやり果たし、家路に着こうとしている。何という勇者なのだろう。思わず彼女はaカンタンの息を漏らす。地球の自転に逆らい、光の速度に近づいて移動した彼らの体が、なぜごく当たり前のようにそこにあるのか、奇妙な気分に陥る。

海と河口と倉庫、ボートと飛行機、水鳥と橋。そうしたものたちが窓の向こうを流れてゆくなか、途中、競馬場が見えてくるのを彼女は密かに楽しみにしている。競馬については何も知らない。馬券を買ったことも一度もない。けれど競馬場が少しずつ近づいてくると、なぜか息が普段より深く吸い込めるような気がして、体がほぐれる。味気ない風景の中に、土と生き物の気配がするからだろうか。あるいはそこだけぽっかりと切り取られた楕円形が、何かに［A］た世界のように見えるからだろうか。

実際に馬の姿を目にできるチャンスは少ない。それでも馬場の外側に規則正しく並んだ厩舎の中で、彼らが大人しく体を休めている気配は十分に伝わってくる。あちらこちらに干し草が積み上げられ、バケツや長靴や見慣れない道具類が置かれ、厩務員宿舎のベランダには洗濯物が干してある。がらんとした馬場は、馬が走るための場所だとは信じられないくらい完璧に整備され、わずかな足跡一つ、枯葉一枚落ちていない。無人の観客席と屋根が綺麗に楕円を縁取っている。切り取られているはずなのに思いがけず、そこだけ空が広々として見える。

あっという間に競馬場は過ぎ去ってゆく。その最後の一点が消えてなくなるまで、彼女は瞬きもせずに見つめ続ける。相変わらず彼女は旅人に囲まれている。使い古し、くたびれ果て、糸がほつれ染みだらけになった足元の手提げ袋からは、鍋の柄が覗いている。

その小母さんはいつも、ビーズで編んだ朱色のハンドバッグを提げて現れた。縦十五センチ横

二十センチほどの、薄っぺらでほとんど何も入りそうにない、夜店で売っているような①子供だましのそれを肘にぶら下げ、ゆっくりと店内を歩き回った。流行遅れだがこざっぱりとした装いをし、きつくパーマのかかった髪を肩に下ろし、耳たぶには真珠のイヤリングなどはめて一見きちんとした様子ではあるものの、悪趣味なハンドバッグ一つのせいで妙に目立っていた。B と痩せて首が長く、顎がとがり、顔は乾燥してかさかさしていた。

小母さんは滅多に買い物をしなかった。ごくたまに、片手に持てるほどの品、胡瓜一本、佃煮一瓶、油揚げ一枚くらいを購入するにすぎず、レジで支払いをする時は、ハンドバッグのファスナーを開け、もったいぶった手つきで C と、お札を一枚だけ取り出した。後ろに並んだ客はbロコツに D した表情を浮かべた。お札はビーズに押し潰され、皺々になっていた。

買い物の用もないのに小母さんは日に何度でもやって来た。店内を何周も巡り、特売品の前を通るたび試食品に手をのばした。小母さんは彼女にとって、デモンストレーションガールの技量が及ばない数少ない客の一人だった。小母さんは決して特売品を買わないのだった。

それでも彼女は快く紙皿を差し出した。

「お一ついかがですか。お安くなっていますよ」

買ってくれないことは十分承知しながら、他の客たちと差別することなく、ちゃんといつものc台詞も口にした。小母さんは遠慮などせず、E が悪そうにもせず、いたって堂々と振る舞った。勧められたからには断るのも悪かろう、とでもいうかのような態度で一つをつまみ、口に運び、長い首の筋をうねらせながら飲み込んだ。肘で朱色のハンドバッグが揺れていた。

「まあ、こんなものね」

そして一言、何かしら感想を述べ、一応「買おうかしらどうしようかしら、でもやっぱりやめておくわ」という態度をほのめかした。本当は二つ三つ、もっと食べたいのだろうがそこはプライドを保ち、店内をもう一周するだけの間隔を空けた。

何度でも彼女は小母さんに付き合った。あまりにたくさん小母さんに食べられて試食品が足りなくなれば、作り足すだけのことだった。嫌な顔は見せないし、ましてや「お一人様一つでお願いします」などというルールを持ち出して追い払うような真似はしなかった。

だからだろうか、それとも凝った試食品がよほどお気に入りなのだろうか、彼女の後を追い掛けるようにして小母さんは登場した。彼女がどういうローテーションでどのスーパーマーケットに立つか、すべてを把握していた。

「ちょっとお塩が足りないんじゃないの？」

時にはアドバイスをくれることもあった。

「もっとダイナミックに切ったらどう？　こんなに F しないで」

と、ボリュームを要求されることもあった。

少しずつ彼女は小母さんの好みを把握していった。さっぱりとした品、例えば乾燥ワカメの酢の物やはんぺんの生姜醤油焼きなどよりも、もっと濃厚でパンチの効いたものを好んだ。やはり揚げ物が一番で、豚の薄切りにスライスチーズを挟んでフライにした時は、史上最多の周遊回数を記録した。また、甘い物に目がなく、空豆が苦手だった。紙皿に茹で空豆とサワークリームのディップが載っているのを発見した時の落胆振りは、気の毒なほどだった。

どういう目的であれ、そのような客がいることを彼女は悪くないと感じていた。たとえ売り上げに反映されなくとも、自分のデモンストレーションが誰かに求められているという事実に変わりはなかった。いつしか彼女は小母さんのために、やや大振りな試食品を用意し、台の下にこっそり隠しておくようになった。小母さんがやって来るとそれを紙皿に載せ、手に取りやすいように差し向けた。小母さんがそれを取り損ねることは一度としてなかった。彼女の小細工にかかわらず、小母さんはいつでも一番大きなのを選ぶからだった。

十分に顔見知りと言っていいほどになってからも小母さんは、②気安い態度は取らなかった。あくまでも通りすがりの客と、デモンストレーションガールの関係を保ち続け、試食のあとは律儀に「［　G　］」というポーズを取り続けた。

朱色のビーズのハンドバッグは遠くからでもよく目立った。いくら店が混雑していても、その朱色だけは人の波に紛れることなく、［H］と翻（ひるがえ）りながら、彼女の周りを回っていた。

ある夏の朝彼女は、一頭の競走馬がフランスで行われるレースに出場するため空港を飛び立った、という新聞記事を目にする。ディープインパクトと名付けられたそのクラシック三冠馬(注1)は、権威ある凱旋門賞（がいせんもん）(注2)での優勝が期待されているらしい。

なぜそんな記事を心に留めたのか、彼女は自分でも説明がつかない。クラシック三冠の意味も、凱旋門賞の重みも③ぴんとこない。ディープインパクトの名を耳にしたことはあったかもしれないが、ただそれだけの話だった。

にもかかわらず彼女は記事を二度、三度と読み返し、付け足しのように添えられた最後の一行に視線を落とす。

『慣れない土地への移動のストレスを緩和するため、ピカレスクコートが帯同馬としてともに出国した』

新聞にはコンテナに入れられた二頭の写真が載っている。彼らは伏し目がちに寄り添い合い、大人しく立っている。ディープインパクトの方が少し小柄に見える。悪漢、の名(注3)とは不釣合いに、ピカレスクコートは穏やかな目をしている。彼女はピカレスクコートの方ばかりをいつまでも見つめている。

時間が来て、彼女は慌てて仕事へ向う支度をする。いつもの手提げ袋にコンロやボンベや鍋やエプロンや、その他一式を詰め込んでゆく。その日の特売品はホットケーキミックスだから、ボウルと泡だて器も忘れないように用意する。元々は布団が入っていた袋は、いびつに縫い目が伸びきり、持ち手は磨り減り、油やソースや醤油が染み込んで何とも言い難い色合いに変色している。それを持つと、体の半分が覆い隠されてしまう。

他の乗客たちの邪魔にならないよう、両足の間に袋を置き、ふくらはぎで挟むようにしながら彼女はモノレールの扉にもたれる。頭の中でホットケーキを焼く手順をおさらいする。ほどなく競馬場が見えてくる。相変わらず馬の姿はどこにもない。

二頭は無事、目的地に到着しただろうか。彼女は再び彼らのことを考える。せっかくあれほど見事に整備された、一切の妥協を許さない一続きの楕円に守られて走っていたのに、不意にそこから引きずり出され、狭く暗い箱に閉じ込められ、遠いどこかへ連れて行かれる彼らに、同情を寄せる。

それでもまだディープインパクトはいい。d類まれな才能を持ち、偉大な勝利を重ね、大勢の人々の期待を受けて晴れ舞台に立つのだ。彼は誰からも注目され、称賛され、何度でもその名前を口に出してもらえる。どんな小さな箱に閉じ込められようとも、一旦扉が開けば、そこには光があふれている。④光は彼を目指して降り注いでくる。

⑤ならば、ピカレスクコートはどうなるのだろう。彼女は一つため息を漏らす。ボウルの中で泡だて器が［ I ］鳴るのが気になり、ふくらはぎにもっと力を込める。競馬場は後方に過ぎ去り、海の向こうを横切る飛行機の姿が見えてくる。

ストレスを慰めるために選ばれたくらいだから、きっと彼は心優しく忍耐強い馬に違いない。本当なら彼だって見ず知らずの遠いどこかへなど行きたくはなかっただろうに、友人の支えとなるため、自分に求められた役目を果たすため、旅立つ決心をしたのだ。

コンテナの中で彼はディープインパクトに首を寄せ、鼻先を近づけ、彼らだけに通じる言葉を交わし合う。一体いつになったらこの暗闇から解放されるのか、絶え間ないエンジン音がいつ止むのか、この先に何が待っているのか、次々とわき上がってくる不安を鎮(しず)めるため、互いの体温を伝え合う。

さあ、いよいよ現地に到着する。調教がはじまる。当然ながらすべてにおいて、ディープインパクトが優先される。より大切にされより心配されより慎重に扱われる。食欲はあるか、脚に異常はないか、咳をしていないか、関係者たちは［ J ］しながら見守る。何か不都合が生じるなら、ピカレスクコートの方であってくれ、とさえ思うかもしれない。もし例えば、馬の神様が現れ、一頭を生贄(いけにえ)としてeササげよと命じれば、皆迷わずピカレスクコートを差し出す。

誰もがディープインパクトについてばかり考えている。集まってくる人々が全員、例外なくディープインパクトだけを見つめる。そのそばにもう一頭いる馬のことなど視界にも入らない。それでもピカレスクコートはひがむでもなく、愚痴をこぼすでもなく、泰然と干し草を食(は)んでいる。生贄となる準備を、ちゃんと整えている。

車内アナウンスにはっとし、慌てて彼女は手提げ袋を持ち上げる。いつの間にか、特売品のホットケーキミックスを売るべきスーパーマーケットの、最寄り駅に到着している。

注

1　クラシックレースである皐月賞、日本ダービー、菊花賞を勝利した馬。

2　フランスのパリロンシャン競馬場で毎年十月に開催される競馬のレース。

3　ピカレスクとは、「悪漢の」の意。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「子供だましの」、②「気安い」、③「ぴんとこない」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①子供だましの

ア　子供用の
イ　可愛らしい
ウ　子供っぽい
エ　安っぽい
オ　あか抜けない

②気安い

ア　軽率な
イ　打ち解けた
ウ　信頼できる
エ　本心を出す
オ　奥ゆかしい

③ぴんとこない

ア　考えられない
イ　聞いたことがない
ウ　ひらめかない
エ　興味がわかない
オ　よくわからない

問三　空欄Aに入る最も適当なことばを本文中から三字で抜き出し、書きなさい。

問四　空欄B・C・D・F・H・I・Jに入る最も適当な表現を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　イライラ　　イ　ギスギス　　ウ　びくびく　　エ　チラチラ　　オ　のろのろ
カ　ちまちま　　キ　カシャカシャ

問五　空欄Eに入る最も適当なことばを、平仮名二文字で書きなさい。

問六　空欄Gに入る最も適当な表現を、本文中から十二文字で抜き出し、書きなさい。

問七　彼女にとって小母さんは、どのような人物か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　商品を買う気はなく、試食品を食べたいだけであっても、仕事のやりがいを彼女に実感させてくれる満更でもない人物。

イ　彼女の試食品を食べるだけで、その特売品は買わず、文句のようなアドバイスをしてくる図々しくて、迷惑な人物。

ウ　試食品を食べても商品を買ってくれないため、なんとか工夫して買ってもらいたいと彼女を奮起させてくれる人物。

エ　彼女の後を追いかけるほど、その試食品を気に入ってくれているため、彼女に満足感や達成感を与えてくれる人物。

オ　買う気もないのに、何度も試食品を食べ、その上買おうかどうか迷うふりをしてみせる鼻持ちならない人物。

問八　傍線部④「光は彼を目指して降り注いでくる」とあるが、それはどのようなことか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　到着して箱が開けば、最初に明るい光を浴びるのは、何事においても優先されるディープインパクトであるということ。

イ　到着して箱から出れば、ヨーロッパのまばゆい光を受けて、ディープインパクトの威光がさらに輝きを増すということ。

ウ　到着して箱から出れば、人々の期待や称賛に満ちた眼差しがディープインパクトに注がれるということ。

エ　到着して箱が開けば、ディープインパクトの写真を撮ろうと、多くのフラッシュの光が注がれるということ。

オ　到着して箱が開けば、ディープインパクトは人々の好奇の目に晒され、絶えず注目を浴びるということ。

問九　傍線部⑤「ならば、ピカレスクコートはどうなるのだろう」とあるが、彼女はピカレスクコートをどのような馬だと考えているか。本文の表現を用いて、一〇〇字以内で説明しなさい（句読点や記号も含む）。

（下書き用）

問十　本文の表現や内容についての説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　帯同馬であるピカレスクコートに同情し、その気持ちに思いを馳せる一方、商品を買わずに試食品を食べるだけの小母さんに困惑しながらも対応する姿から、彼女の気弱で優しい人柄が巧みに表現されている。

イ　ただ試食品を食べたいだけの小母さんに対し、デモンストレーションガールとして最善を尽くそうとし、様々な工夫を凝らしていく彼女の姿を通して、自分の仕事に向き合うことの大切さが描かれている。

ウ　ディープインパクトのために慣れない移動を強いられたピカレスクコートに、移動に恐怖心を抱く自分を重ね、ピカレスクコートの苦悩や悲しみを代弁し、競走馬の世界の過酷さや非情さを示している。

エ　小母さんとの試食品を巡るやり取りや日常生活を過去形で示し、ピカレスクコートの気持ちを想像するところについては現在形で示すことによって、過去形は日常世界を表し、現在形は非日常の世界を表している。

オ　ピカレスクコートの境遇に対し、彼女が彼の身になって彼の状況や気持ちを想像する様子や試食品を食べたい小母さんの思いを丁寧に受け止める姿を通して、彼女の人間性が巧みに表現されている。

（三）　次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①この資料は貴重だから（　　）としてのこしておこう。
ア　アジェンダ　　イ　ガイドライン　　ウ　コンテンツ　　エ　アーカイブ

②持っている資産をうまく（　　）したい。
ア　運営　　イ　運転　　ウ　運用　　エ　代用

③体制を（　　）にして敵に備えた。
ア　王道　　イ　定石　　ウ　正当　　エ　盤石

④まるで恋人に会うように嬉しそうに（　　）と出掛けた。
ア　いそいそ　　イ　こそこそ　　ウ　しゅくしゅく　　エ　めそめそ

⑤彼自身、進学するか棋士になるか（　　）がつかずにいる。
ア　けり　　イ　ふんぎり　　ウ　だんじり　　エ　まんじり

⑥さすが賞をとった小説だけあって、クライマックスは（　　）だった。
ア　圧巻　　イ　佳境　　ウ　塩梅　　エ　大団円

⑦「（　　）に構える」とは、身構えたり、皮肉な態度を取ったりすることだ。
ア　正　　イ　前　　ウ　斜　　エ　地

⑧「いやがうえにも」とは（　　）という意味である。
ア　いやいや　　イ　そこそこ　　ウ　おずおず　　エ　ますます

⑨あのアイドルは（　　）令和の人気者になった。
ア　押しも押されぬ　　イ　押すも押させぬ　　ウ　押したり引いたりもせぬ
エ　押しも押されもせぬ

⑩梅雨の合間の晴れ間のことを（　　）という。
ア　梅雨空　　イ　五月晴れ　　ウ　小春日和　　エ　お天気雨